

校長室だより～和光高校今昔 第11号 H26.7.18

埼玉県立和光高等学校 校長 村田 進

「若樹」創刊のころ

「若樹」とは生徒会機関誌の名称で毎年卒業式を目安に作成され年度末に配布される。ただしそのことが明示されたのは昭和58年3月発行の第9号からで、それ以前の号には特に記されていないし、そもそも何故「若樹」かについても触れられていない。なかなかセンス溢れるネーミングで今春には40号まで伸びている。この第9号は、生徒会顧問であった菅原達志・藤野賢両教諭のテコ入れでその後の発刊のポリシーとスタイルの礎を築いたという点で大いに価値がある。

さて、「若樹」第1号だが、最終頁を見ると印刷・発行が昭和49年1月となっているがこれは、翌50年の誤りであろう。開校三年が経過し第1期生の卒業に合わせた内容となっているからだ。初代生徒会長淵田昌嗣さんの巻頭言、2代目会長重田整孝さん（現同窓会長）の「厳しさの中から生まれる歴史」は中々の名文である。その中には「1期生入学式から今日までの3年間の記録」とあり、次頁の高島朗初代校長先生も「校庭の思い出」というタイトルで開校当時の職員生徒一岩となった学校づくりの奮闘ぶりを回想されている。これらは素晴らしい文章であると同時に貴重な歴史的資料でもある。発足から第一回生徒総会、生徒会役員選挙、第1回・第2回和光祭など黎明期の生徒会活動を辿り、初代及び2代目の生徒会役員全員の名前も記録されている。ちなみに第1回の和光祭テーマは「我らの道を求めて」、2回目は「創造の喜び」であった。私もほぼ同時期に高校時代を過ごしていたがまさに夏木陽介や竜雷太の世界が見え隠れする。さしずめ吉田道行先生が野々村健介だったのだろう。創刊号ではこの後も定番となるクラス紹介とともに、卒業生一人一人の言葉を見ることができる。後年とは異なり全員が極めて真面目に卒業に当たったの心境を綴っている。石山さんの「あせらずゆっくりやさしくおちついて」や芳野さんの「我人生に樂なし」はいかにもだし、石堂先生の「自分に負けることなく精一杯生きたい」は涙を誘う。

ところで若樹の表紙からは時代を写しとることができる。ちなみに創刊号は書道の川端三代子先生が題字を書かれている。面識はないがご結婚されて

直後のことであろう。表紙には題字と共に「伸び行く」若樹がモチーフとなる絵が描かれる。切り株から出る新芽、掌に包まれた小さな木、渦に耐える



左上から順に1号～8号、2段目9号～16号、3段目17号～24号

樹木などが様々な技法でデザインされている。古い時代ほど近年に比較し力作が揃っているようだ。若樹編集委員長の力の入りどころだろう。それに比べるとクラス紹介は玉石混交という言葉が当てはまる。各クラスの委員の考え方にもよるが面白いものは本当に面白いし、雑ばくなものも残念ながらたまにある。そのような多彩な記事の中で私にとってもっとも印象に残っているのが第11号に掲載された内田章文教諭の「いい人になるな」の一節である。要約すると「いい人」とは「都合のいい人」か「どうでもいい人」の2種類がある。だから自分は絶対に「いい先生」にはなりたくない、という内容である。これを読んでから座右の銘としていい先生にならないようずっと心掛けてきた。以来、紹介してくれたウッチー先生（川越女子高勤務）を現在でも崇めている。